

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

# 精霊巫姫

大杉和馬

表紙イラスト／鈴音れな

試し読み版

**当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『精霊姫リーン』に基づいて作成しております。**

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 精霊姫リーナ

大杉和馬  
表紙 / 鈴音れな

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

Characters

---

## リーン

火を司る精霊の姫。強大な力を持つも、同胞である精霊に対して非常に慈悲深い。

とある大都市の一角、整備されずにそこだけ人々から忘れられ放置された区画が生み出した人気のない路地裏。どんなに開発の進んだ都市においても必ずと言ってよいほど存在する都市の暗部だった。

肌に粘つくような空気、ビルの谷間から差し込む月光や夜風さえ薄暗く澱む。物質文明が生み出した歪み、社会の膿とも言うべき、おぞましい負の波動と瘴気が支配する呪われた力の渦巻く魔界と化していた。

オオオオオッ……。

グニヤリと世界そのものが不気味に揺らめき、景色がまるで陽炎のように歪む。その歪みからは黒い霧のような存在が滲み出るように現れ、同時に断末魔にも似た禍々しい咆哮が路地裏に響き渡った。

現れたのはあまりにも不気味な存在だった。その形は不規則に変動し、気体ガスのようにも見えるし、粘動体スライムにも見える。色彩はあえて表現するならば黒だが漆黒と言うにはほど遠く、全ての色を無茶苦茶に混合させて生み出したようなおぞましい暗濁色だった。

世界が嘆き、畏れ、そして悲鳴を上げている。それは忌むべき穢れの誕生、自身を蝕む病巣の発露に等しい。狂わされた自然の秩序が生み出した闇は世界そのものをゆっくりと呑み込んでさらに混沌とした歪みを大きくしていこうとする……。

——ゴウツ!!

瞬間、まるで地上に太陽が顕現したかと錯覚するほどの強烈な光の大爆発が周囲の全てを巻き込んだ。目映ゆい紅蓮の輝きは不思議と目を焼くことはない。赤光が渦巻くように螺旋を描き大気の色さえ染め変えながら、峻烈な光が穢れきった空気を焼き払い、澱んだ闇を切り裂いていく。

緋色に輝く清風が吹きぬけ、目映ゆい風が収まった後に悠然とそこに立っていたのは一人の少女だった。まず目につくのは燃え盛る炎が具現化したような紅蓮の長髪だろう。まるで髪自体が赤い輝きを発しているかのような透き通るような紅彩、癖など微塵もなくまつすぐに伸ばされた髪は地面につきそうなほどに長い。

スツと目鼻立ちの整った顔立ちは女性的な美しさよりも中性的な凛々しさが際立ち、何よりその内面から溢れ出るほどに眩しい生気の輝きが彼女の魅力をさらに引き立てている。髪と同色に燃える真紅の瞳には折れることを知らない強き意思の煌めきを宿し、鋭利に跳ねた眉目が勝ち気そうな少女の表情を美しく彩っていた。

どこか浮世離れた美少女は身に纏うの衣装も一風変わったっている。古代神話の女神たちのような純白のトーガを直接肌の上に羽織り、健康的に焼けた小麦色の肌と雪を思わせる白い衣装とのコントラストが目にも鮮やかだ。薄いシルクの布地を押し上げる豊かな胸の膨らみ、細く引き締まった腰から艶やかな尻までが見惚れんばかりに美しいラインを描いている。

丈の短いスカートが風で翻るたびにそこからチラリと垣間見える眩しい太ももに目を奪われ、タンクトップ状の細い肩紐が首筋や肩口を大胆に曝す様など思わず息をのむほど扇情的だ。しなやかに伸びる脚は靴も履かない裸足で、魅惑の太ももから細い指先まで艶やかな脚線美をこれでもかと露出させている。それでも少女の醸し出す不思議な神秘性ゆえか不思議とその姿に嫌らしさを感じさせることはなかった。

そう、彼女は人ではない。世界を形作り、支える存在。火の温かみを、風のすがすがしさを、土の健やかさを、水の清らかさを司り、生み出してきた偉大なる存在<sup>も</sup>である。

——精霊、伝承の中などでそう呼ばれてきた。かつてまだ人が自然とともに在り、自然の一部だった時代、かけがえのない同朋であり、友人だった彼らが幻と物語の中へと姿を消したのはいつ頃だったろうか？

その精霊たちの中でも最も原初にして高位とされる偉大なる四大。地水火風の四柱の一角である炎の最高位、精霊<sup>せいれい</sup>姫<sup>ひめ</sup>と呼ばれる存在が彼女——リーンだった。

「……酷いわね」

すらりと伸びた片手を細い腰に当て、逆の手で苛立つように髪を後ろへと払う。パッと髪の毛が発した燐光が飛び散り、火の粉が舞うかのように夜闇を薄く照らした。

まるで炎そのものが具現化したような紅の姫君の周囲で色を失っていた世界が、彼女を祝福するかのように命の息吹を取り戻していく。

オオオオツ……。

世界を蝕んでいた黒い歪みが、穢れた澱みがまるで恐れ、逃れようともがいている。だが彼女の前では逃亡も、ましてや抵抗など許されるはずもない。太陽が放つ紅炎プロミネンスの渦に塵芥が放り込まれるに等しかった。

「ほら、怖がらないで……もう大丈夫だから……ね？」

絶対存在とも言うべき炎の女神は、優しさに満ちた声で穢れきった存在たちを忌むこともまた恐れることもなく近づいていく。少女のあまりにも目映ゆい魂と生命の輝きに照らされただけで矮小な闇が薄れ、悲鳴を上げながら焼かれるだけの存在にリーンは、差し出した掌を胸元に戻すと慈愛に満ちた顔を悲しげに顰めた。

自然との調和を忘れた人間たちの社会が生み出した歪み、それは時として自然そのものと言つてよい精霊たちをも蝕む。穢れた空気、死んだ水、乾き壊れた大地が力弱い精霊を巻き込みながら狂っていくのだ。

「この精霊セイレイたちを救いし、浄化きよめの光を……」

瑞々しい桜色の唇から漏れる呟きは、小さいが薄いガラスを叩いたように甲高く澄んだ音を奏でた。そんな耳に残る残響も消えぬ間に突如吹き荒れる光の奔流、視界の全てが呑み込まれる。先ほどの輝きを太陽と評したが、これはもう新星の爆発にも匹敵した。夜が一瞬、昼を越え世界がただ白の光のみで埋め尽くされていく。



オアア……アアアアア……アア……。

闇たちの、魔精霊の上げる苦悶の絶叫も秒にさえ満たない一瞬の出来事だった。それなのに、まるで時間が刹那で区切られコマ送りでもされているかのようには、長い、長い残響を残して断末の声が焼き尽くされ、影は光に駆逐されていく。

無限とも思える時間が過ぎ去り、光の爆発が収まるとそこには紅くれないの精霊姫だけが立っていた。しかし周りの風景自体は爆発前と何ら変わることはない。驚くべきことにあの超爆発は路地に転がる空き缶一つ吹き飛ばすことさえなかった。

何一つ変わっていないように見える風景は、しかし同時に何もかもが変わっていた。空気さえどす黒く汚れ、呪われた異界と化していたはずの路地裏を支配するのはどこまでも清澄に研ぎ澄まされた優しい空気だった。高位の霊山を思わせる透き通った霊気はむしろミスマッチでさえある。

……イン………リイン……。

やがて澄みきった空気自身が共鳴しているかのような不思議な韻が辺りに響き渡り、リンの周囲で淡い輝きがふわふわと螢火のように緩やかに舞い始めた。

それは確かに魔に憑かれ、闇に汚されたはずの精霊たちだった。自我さえ失い全てに害為す存在になり果てていた彼らが歓喜の声を奏でながら舞い踊っている。はたしてどれだけの数いたのか、その螢はどんどん増えていて、数えることさえ覚束ない。

かくマッサージするように揺すり始める。

半透明の液体の中で自分の乳首が抓られ、引つ張られ、円を描く様がいやでも視界に入り、たまらない恥辱と背骨の中心を叩きつけるような快楽の波に否応なく身体が高まっていった。

「嬉しいなあ。お姫様も喜んでくれて……あははは……ねえ？ そんなによかった？」

「違っ……はう……違うわ……だ、誰が……んはああ……いやあ……もう、もう吸うなあ!!」

悔しさのあまりたまらなくなって叫ぶ。床についた腕に額を押しつけ、嫌々をするように首を振った。薄く紅潮した素肌に玉のような汗が浮かびあがり、ほつれた髪の毛がうなじや背中に張りついている様がひどく官能的だ。

触れられる面積が増えるたびに力が失われるスピードは速くなっていく。急激な脱力とともに強まる危機感、なのにそれを裏切るように身体はますます熱く燃え盛り、神経内を駆け巡る快楽も勢いを増していった。

ガクガクと足が震え、熱く乱れる吐息に甘い官能の香りが漂ってきそうだ。紅蓮に燃え輝く髪からは、いくつもの火の粉が散華しながら闇の中を美しく跳ね、その一部はスライムの内側で楽しげに弄ばれている最中だった。

赤く紅潮した頬をジェルが撫で上げ、それが首筋や耳元にまで緩やかに滴る。まるで舌

の先でくすぐるかのように敏感になった部分を刺激され、甘美な感覚の矢が背筋を抜けて脳天まで駆け上がった。

「嘘はいけないよ。ほおら、ここはもうこんなになってるんだから……」

「はあうっ!! ひっ、そ……そこっ!! そこは……ひいああああつ!!」

ピクン!! 大きく背筋が震え、勢いよくポリュームのある桃尻が跳ね躍る。今まで太ももの付け根あたりで蠢いていた悪夢の触手がついにその先端を奥の奥まで伸ばしていた。清潔な真白の布きれ、最後の聖域を隠す下着の中に不埒な侵入者は突貫する。誰の目にも触れたことのない高貴なる精霊姫の花園からクチュリとヌメリを帯びた水音が響いた。

落雷にも似た衝撃と閃光が女の中心を突き抜け、聡明な脳を中心へと稲妻の矢が突き刺さる。熱く潤い始めていた秘園を酸で焼かれたような痛烈な激感に頭蓋の裏から突き上げられ、俯いていた美貌が勢いよく前を向く。

チュプリ、クチュリ、ピチュリ……チュルル!!

「くううううっ!! そんな……そんな動かないで……あふう……いやっ、いやよ……だっ、駄目ええ〜っ!!」

何かを掻き混ぜるような、吸い上げるような音が自分の足の間から響き、ただでさえ熱くなっていた秘芯が沸騰したかのように一気に燃え上がった。血流が加速的に血管内を掻き混ぜる速度を増し、肥大した神経に膨大な感覚の情報が雪崩れ込んできた。

「ふうあああああ!! こんな……はっ、何なの……私……? んはあっ!! な……なに、なによ? これってええ……? はひいんんっ!!」

神経を直接揺さぶるかのような快樂振動のあまりの激しさに、意識がかき乱されて集中が幾度も断線された。体奥から次々と押し寄せる連続の波頭に、少女は恐怖と戸惑いに激しく悩乱する。

「あっ!!?!」

そんな弱気になった少女の心の隙を突いた漆黒のスライムが呼吸するように開閉する秘唇の上で寂しげに輝くピンクの小豆に吸いついた。快樂神経の塊に濃酸で烙印を押されるような熱さと痛みが突き抜け、まったく同時に破滅的なまでの快樂の爆発が胎内を紅蓮の炎となつて吹き荒れる。

「だ、だめええええ——ッ!!」

見開かれた貴石の瞳が霞むように焦点を失い、意識が一瞬にして弾け散った。子宮が吹き飛ばすほどの衝撃が尾てい骨から背骨を伝い、身体を中心に揺さぶりながら脳蓋まで突き抜ける。肺の中の空気が一瞬にして消去されたような息苦しさに夢中で口を喘がせ、大きく開けた唇が酸素を求めるように空しく開閉した。

ザワリッ!!

休む暇さえない。とどめとばかりにスライムの動きが激しさを増し、ブルブルとプディ

ングのような身体を振動させ、液体内に閉じ込められた波がその衝撃を余すことなくリーンの肉体へと打ち込んだ。

硬く尖った乳首に、変形させられた白桃の果実に、包皮を剥かれた秘豆に、背中に、腰、脚、腕……多方向から異種の快感が怒涛となって神経を伝播し、まったく同時に押し寄せてくる。どす黒い快楽の大海に浮かぶリーンの無垢な精神は、連続絶頂の荒波も木の葉のように翻弄され続けた。

「やつ、ひいうう、いやあつ、いやあああああゝゝゝつ!!!」

パアアアアア——ツ!!

リーンの絶頂に同調するように全身から紅の極光が溢れ出し、無数の燐光が闇の中を乱舞した。美しくも儂い輝きが無理矢理に果てさせられた少女の悲しみを表すように舞い落ち、ゆっくりと闇の中で薄れ……消えていく。

ピクン!! ピクン!! ピクン!!

膨れ上がった感覚の落差は数倍にも悦楽の刃を研ぎ澄まし、腰の奥深くで燃えたぎる快感中枢へと休みなく突き立っていく。壊れたバネ仕掛けの人形のように腰が跳ね回り、力の入らない爪先で空しく幾度も地面を蹴りつけた。

強酸性の唾液で秘口を幾度も舐められる凄烈な愛撫に太ももを伝い落ちる快楽の雨は滂沱となって降りやまず、白く泡立った蜜液が黒いスライムの体液へと混じりどす黒い体内

へと溶け込んでいった。粘膜を焼く液体は熱く火照るリーンの陰唇を飽くことなく舐め上げ、沸騰させ、さも美味そうに愛液を啜る音が薄暗い路地裏にぴちゃぴちゃと響き渡る。「おやおや、精霊姫様はもうイッてしまったのかい？ あははは……まだまだこれからなのねえ」

グツタリと地面に全身を投げだし、力なく荒い息をつくリーンを見下ろし少年はさもおかしそうに嘲笑う。幼い外見に不相応な欲望にぎらつく視線で精霊の姫君の美しい肢体を舐めまわしながらゆつくりと近づいていった。

「あつ……」

ザワリ……。

絶え間ない悦楽に翻弄され、力なく倒れ伏した精霊の少女の身体が浮き上がる。黒の汚粘物が姫君の体位を好き勝手に入れ替えながらその形を変えていった。

「いい眺めだねえ。リーン様……ほんと綺麗だよ」

あからさまな侮蔑の称賛に高貴なプライドを切り裂かれ、誇り高い心が軋みを上げる。両の腕を頭の上で拘束され、カモシカのような両脚は無理矢理にM字へと広げられていた。さながらどす黒いウオーターベッドに背を預けるかのように真紅の少女は憎い少年の前にその美しい肢体を曝け出されている。

「うっ……くっ……だ、黙りなさい。私は……こんな……ことくらいで……」

そんな気丈な言葉も途切れ途切れ、身体の奥から止めどなく溢れる熱によって赤らんだ肌、熱く乱れた息が切なげだ。気の強そうな紅蓮の瞳も潤んでは迫力を失い、濡れ透けた白い布地の下で形良い胸が喘ぎに大きく上下している。

「素直じゃないねえ。身体はこんなに正直になつてゐるのに……」

リーンのすぐそばまで歩み寄つた少年が、広く開かれた足の間に屈みこんだ。辛うじて恥ずかしい場所を覆い隠す布地をわざとらしく大きく持ち上げ、じつくりと鑑賞するように熱い視線を送つた。

「なっ?! な、何を見ているの……? や、やめつ、見ないでっ!!」

恥辱にただでさえ赤らんだ肌が真っ赤と言つていいほどに紅潮する。自由にならない身体を必死に振つて少年の視線から逃れようとするがスライムの拘束はビクともしない。

あまりの羞恥に暴れる少女を意にも介さずに少年は指先で摘まんでまくりあげたスカートの中を覗きこむ。足首が真っ黒な触手に巻きつかれ、ビクビクと震えるだけの太ももの内側を逆の掌でゆつくりと撫で摩りながらその付け根へと手を近づけていった。

「汚らわしい手で触らないで……あつ、ひやあつ!!」

跳ねるようにリーンの上半身が仰け反り、形良い頤おとがが天へ向つて振り上げられる。燃え立つような髪がパツと勢いよく宙へと舞い広がって火の粉を散らした。

「おやおや、こんなに出来上がつてるじゃないか……駄目だよ? 嘘つきの精霊姫様♪」

発する。秘孔の入り口から解き放たれた真つ赤な稲妻が子宮の奥で勢いよく跳ね返り、狭い膣洞を乱反射しながら駆け廻った。

限界まで開かれた毗から涙が零れ落ち、まったく同時に根元まで刺し貫かれた秘唇から真紅の雫がどす黒い肉茎を伝って床に滴り落ちる。泡立つような牝の白蜜と破瓜の赤が混じりあい、リーンの脚元に奇妙に美しいコントラストを描きだした。

「あつ……ぐつ……痛つ……痛いいいいっ!!」

道を開かれたばかりの無垢な膣孔を圧倒的な熱の塊に圧迫され、同時に魂の奥深くに焼きごてでも押しつけられたかのような圧倒的な痛みとどす黒い熱がリーンの何もかもを塗り潰していった。

炎の精霊であるはずの自分の内側が焼き尽くされていく異質な感覚とともにカチリと自分の中で何かが切り替わり、自分と言う存在が別の何かに塗り変わっていく。吸い尽くされ、失われた力の代償におぞましくもどす黒い何かが少女から大人へと変わったリーンの中へと侵入してきた。

「おめでとう……リーン様……これで君は完全に僕のものだよ」

激痛に硬直する身体の上へと少年が覆い被さり、そのまま純潔と自由を奪われたばかりの姫君の唇を自分の口で塞ぐ。細い背中に利き手を回し、うなじを支えるように逆の手を添えた口付けは恋人同士のように熱烈で濃厚だ。



「う、嘘よんんっ……ふううんっ……あはぁん……そんなの……あふうん……」

下半身で繋がったまま受ける初めての口付けに力なく首を振るがもう何もかもが遅い。赤い粘膜同士が淫らに絡みあい、粘性の高い唾液が口腔内でドロドロに混ざりあう。おぞましいはずのファーストキッスがなぜか蕩けるように甘く、脳の芯がクラリとくるほどに恍惚とした心地よさに心がいっぱい満たされてしまった。

力を込めて握りしめたはずの拳が安堵に緩み、強張っていた肢体から自ら受け入れるように力が抜け落ちた。まるで反抗する気力が湧かない、何もかも諦めてこの少年に全てを委ねてしまいたくなる。

(な、なに……? ……そんな……うそよ……わたし……どうして……っ)

自分を犯した憎むべき敵のはずなのに、湧き上がってくる不可思議な衝動に心が塗り替えられていく。舌にひどく甘い唾液が意識を蕩かし、熱く絡みあう吐息が肺まで浸透して胸の奥が締めつけられるように苦しい。

紅の瞳を覗きこむ少年の視線と少女の視線が仲睦まじく溶けあい、舌と舌が練り広げる熱烈な抱擁が唾液を攪拌しながらリーンの口腔内を舞台に愛しいヴェーゼを繰り返す。

「んんっ……いやぁ……ぶはっ……くひうん!!」

必死に唇を振り払おうとするが、ズクンと少年根の脈動に呼応するように重い疼きが腰の奥深くで鳴り響き、甘泣きながら少年の腕の中で大きく身を震わせた。

自分の中に打ち込まれた肉刀が胎内をジクジクと熱く焦がし、先ほどまで痛みを訴えていたはずの処女褌は邪悪な侵入者へと愛しげにしがみついていく。お尻の穴へと休みなく送られているスライムのキッスなんてピリピリつと背骨が痺れてもうたまらない。

ズップズップ……ジュップジュップ……。

腰の奥深くに欲望の槍をネジ込まれ、まるで愛しい恋人に抱かれているように身体は従順に快楽へと溺れてしまう。胸が甘美な鼓動を打ちながら牝の中心に叩き込まれ続ける深く重い律動によって自分と言う存在がどんどん変わっていくのを感じた。

乱雑に蹂躪され真つ赤に腫れあがった膣口から蛇口を捻ったように愛液が垂れ流される。会陰部へと放たれる痺れるほどに甘く辛い排泄感に慄き、スライムのキスを送られ続ける卑孔が縮みあがった。

「あひっ……あっ……ああ……いや……いやらのにい……も、もうわたし……わたし……」

氷塊を彫り砕くかのように自分と言う存在が快楽と言う名の彫刻刀で少年の奴隷という作品に創り変えられていく。この憎い少年に犯されることが、抱かれることがこの上なく幸福に感じてしまう。リーンはようやく解放された両手を必死に少年の背に回し、愛しい夫へと抱擁するようにしがみついた。

その長い脚を少年の腰に必死に絡め、自分からおねだりするようにピンクのポッチを相

手へと押しつける。二匹の獣の間で押し潰されマシユマロのように柔らかく形を変える双乳、その先端は淫らの胸字を相手の胸板に描き上げた。

「無理無理、僕の可愛いリーン様……いや、リーン。さあたつぷり愛してあげるよ？ これから君は一生僕から離れられないんだからね♪」

「だ、誰が……誰が……貴方なんか……貴方なんか……貴方……なんか……いはああ」  
 意気を振り絞って叫び返すが、いつしか呼び方が甘えを含んだ貴方へと変わっていることにさえ気付かない。自分を力強く抱きしめる腕、熱い肉壺の中を掻きまわす逞しい肉棒が愛しくてたまらない。剥き出しになった首から胸までを幾度も優しく啄ばんでくる接吻に何もかも忘れて溺れてしまいたかった。心の底から湧き上がってくる悪魔の誘惑に身を任せてしまいたかった。

言葉とは裏腹に腰が勝手に動いてしまう。甘く蕩けきった美貌で嫌々をするように首を振りながらも腕を相手の首に回してしまう。もつともつと求めるように、さらに深く繋がりたいとおねだりするように逞しい胸板に縋った。身体中が燃えるように熱い、炎の精霊である自分が知らない熱で、炎で炙られ焼き尽くされてしまう。

「ふふふ……良いのかい？ 嘘つきなリーン様？ ほら！ ほら！ ほら！ もつと欲しいかい？」

「はあ……いや……言わ……言わないで……こんな……違……私は……あはあ!! 違

うのお!!」

自分を蛇蝎のごとく忌み嫌っていたあの少女が、自分の腕の中で快楽に乱れる姿に腰の奥深くが痺れるような射精感に刺激される。無理矢理に汚された身体が爛れた悦びに溺れ、あの気丈で生意気な姫君が自分の胸に縋りついて泣き叫んでいた。

熱烈な抱擁を交わしあう二人の腰が積極的に淫らなダンスを踊り、漆黒のウォーターベッドの表面を激しく波打たせながら跳ね回る。黒の波紋がその激しさを物語り、熱く溶けきった肉同士が掻き混ぜ肉音と蜜音がどこまでも卑猥な音楽を夜闇に染まった路地裏で響きあった。

(も、だめへえええ……わたし……止まらない……止められない!! 頭が……心が……壊れる……狂っちゃうううう……つ!!)

繋がった部分では破瓜の血がまだ混じった甘いシロップ入りクリームを黒光りする泡立て器が盛んに攪拌する。粘っこく泡立った快楽の蜜がグチュグチュと卑猥な音楽を奏で立て、二匹の獣の結合部では水飴をぶちまけたようになっていた。

「あふああああ……やはあ……こんなの耐えられない……いひやああ……墮ちちやう……駄目になっちゃろお!!」

ザクザクと快楽に切り刻まれる精神が悲鳴を上げ、無理矢理に宿された愛しさに心が打ちのめされる。何もかもが墮落していく、背徳と退廃に満ち満ちた奈落の悦びに吸い込ま

れるように嫌悪や憎悪が潰えていった。

鈴口の先端で捏ねまわされる子宮の奥や膣壁が狂ったように波打ちながら快楽を享受し、脳髓が爛れるほどの真つ黒な快楽が血液に乗って全身を駆け巡る。魂の一片さえ無限の彼方へと吹き飛ぶ究極の恍惚感と飛翔感の前には儂い抵抗などもう意識に浮かびさえしなかった。

「さあ、リーン。僕は君のご主人様だよ!! 言つてごらん!! 君が誰の所有物で誰を愛していくのかをね!!!」

ズンズンズン……グチュグチュグチュ……ッ!!!

8の字を描く腰の動きで快楽を指揮する肉棒が、大音響を奏でるオーケストラを牝の器全体へと鳴り響かせながら最終楽章へと突き進む。クライマックスそれが何を意味するのか魂の芯から理解できてしまう。だけど、それを拒絶する意思も心も、今のリーンには一欠片も残されてはいなかった。

「は、はいいいい!! ごしゅ、ご主人様ああ!! リーンはご主人様の奴隷ですウウウ!!!!  
ご主人様を愛していますっ!! だひやあらもつろもつとくらさい……あはあひいい!! すごひくるうう……きちやうう!! こんな初めてええええ!!」

射精間際のガチガチに硬直した肉棒に小突きまくられ、子宮が快楽で水風船のように膨らむ素敵な錯覚に陥る。膣の裏では赤と白の花火が無数に爆発し、雑巾を絞り上げるかの

ような強烈な締めつけに少年の玉袋内は無数の精子が乱舞を踊りながら出を今か今かと待ち構えていた。

「おっ、おっ、おおおっ!! 出す!! 出すよおオオ!! リーン、リーン、もうもうっ!!」  
グッと力強くリーンの奥深くに腰を沈め、自らおねだりするように口を痙攣させる子宮の中心へと鈴口の先端が力強く接吻する。肉茎が膨張するようにその太さと硬さを増しながら陰囊の中から白の濁流が入り口を指して流れ出してくるのをリーンも少年も究極の法悦の中で確かに感じた。

ズピュルルドルルルルウウツ——!! ドブドブドブツ!!

白色の砲弾が女の中心をぶち抜くように解き放たれる。尿道を突き破るような勢いで解き放たれた灼熱の精液が無垢だった子宮の奥の奥、膣壁の隅の隅まで埋め尽くしていった。黄ばんだ白の子種は牝の器をいっぱい満たし、女性器全体が赤熱するかのように膨れ上がる。

「い、いっばい、いっばいらしれへえええ!! いっちやう!! わらひもイクから、もう、もう……いっちやうんだからああああ——ツ!!」

巨大な何か为天を衝く昇竜のごとく灼熱の砲弾を撃ち込まれた子宮の一点から頭の頂までを一気に突き抜ける。頭の中で意識を焼き切るほどの圧倒的な音と光が雷鳴のように轟き渡り、解き放たれた凄烈な白の衝撃が魂の芯まで揺さぶりながら全身へと拡散していっ

た。

「あひぎいいいッ!! いくうううううッ!! すごいのおお!! わたし、わたしいっひやううううう——ッ!! ご主人様ッ!! ご主人様あああ——ッ!!」

真紅のオーラが再び目映ゆい光輝を放つと少女の絶頂に呼応するように無数の螢火が夜の闇を幻想的に照らしあい、炎が螺旋を描きながら二人の周囲を渦巻いていく。

新星の爆発のように全てを光の中へと消し去りながら忘我の極みへと吹き飛んだ。狂おしいほどの絶頂の渦へと放り込まれた意識が赤と白の極光の中で明滅する。桃源の彼方でリーンの魂は幾度も復活と昇天を繰り返し、最後に何か大切なものが澄んだ音をたてて砕け散るのを聞きながら最後の意識を手放した。

「ああ……ご主人様……いよいよですね」

少年の胸へと全てを預けるようにしなだれかかり、全裸を惜しげもなく曝した真紅の少女が甘えた声を上げて自分の主へと囁く。玉座のような豪華な椅子に腰かけた少年の足には青いショートカットの少女が同じように一糸纏わず身を寄せ、背後からは金髪的美女がその首に腕を回して抱きついていた。

「ふふふ、そうだね。リーン……炎、水、大地の精霊姫は僕の手には落ちた。あとは風の精霊姫を手に入れば四大の全てが僕のモノになる」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**